

日本語の再発見

中国語の特性

中国語の著しい特色の第一は、「一つの音節が、一語としての意味を有ってゐる」といふ所にある。第二は、「音節の数が著しく多い」といふことである。これは、日本語と比較してみるとよく解る。

私は「日本語と中国語とは、世界の言語の中で、両極端を占めてゐる」と思つてゐる。それほど、日本語と中国語とは、いろいろな点でひどく違つてゐるのである。

日本語には、単音節の言葉は極めて少ない。“木”“田”“手”“目”“毛”“葉”などがこれであるが、全体の中で占める割合は極めて少ない。それよりも“山”“川”“畑”のやうに、二音節・三音節の言葉の方が多い。

ところが、中国語は、原則的に言へば、すべての言葉が一音節で出来てゐるのである。ただ、一音節では聴き取り難いから、話し言葉では二音節になることがある。これは、日本語でも、“田”を“田んぼ”と言ひ、“目”を“お目目”、“葉”を“葉っぱ”と言ふのと同じやうなものである。

しかし、理由はただそれだけではない。日本語のやうに、音節を組合せて言葉を作れば、音節の数が少なくても、ほとんど無限と言ってもよい程の言葉が作れるが、一音節では、いくら音節の数が多くても言葉はそれだけの数に限られてしまふといふことにもある。

中国語の音節の数は、今の北京語で言へば一千六百四十四種類ある、といふことである。これだけあつても、一音節では一千六百四十目語しか収容し切れない。同じ音節の中に別の言葉を押込まざるを得ないわけである。

だから、中国語には“同音異語”が多い。漢字はこれを書き分けてゐるから、目では識別できるが、耳では聴き分けることが出来ない。どうしても、二音節にして異つた言葉にせざるを得ないわけである。

例へば、“指”と“紙”とは、同じ発音であるから、耳で聴いたのでは区別できない。そこで、“指”は言葉としては“指頭”と言ひ、“紙”は“紙張”と言つて区別してゐるのである。

この点、日本語は、二音節・三音節の言葉が多いから、音節の数は五十音以上いくらかも無いが、同音異読は極めて少ない。それでも“かみ”には“神”と“紙”と“上”とがあるなど、決して無いわけではない。